今、考える高齢化

生きがいは積極的な社会参加の中に

高齢化社会のなかで、生きがいのある生活をおくることが特に大切だと言われています。生きがいのある充実した生活のなかに、人は幸福や満足を感じるものではないでしょうか。

しかし、生きがいは、個人一人ひとりが自分で選び決めていくことであって、他人が見つけたり、与えたりするものでは決してありません。生活や自分の生き方についての満足や喜びというのは、人それぞれの感じ方や考え方によって違います。生きがいは自ら求め、さがし、創り出すことによって手に入れるものと言えます。

また、生きがいは、人が積極的に主体性をもって社会的役割を自ら見い出し、その責任を自ら担う社会参加にあります。都市化、産業化の急速な進展により、人と人を結ぶ連帯感が失われ、今や地域社会は崩壊したと言われていますが、自分が何か社会に他人に与える喜びのなかに、また、自己表現の喜びを感じるなかに生きがいが生まれてきます。そして、その参加と実現する場と環境を作っていくことが、高齢化社会へ向けての生きがい対策と言えます。

駅前の自転車整理で頑張っています

指導員　辻　嘉一さん(77歳)

昨年の8月から、この自転車整理員の仕事をしていますが、たいへん有意義な仕事だと思っています。

朝6時に起きて、パン食で朝食をすました後、東向日駅前の自転車置き場へ来て、並べ方の指導をする規則正しい生活をおくっています。年をとってくると、この規則正しい生活が一番大切だと常々思っているんです。

でも、仕事をやっていて残念に思うのは、市民のかたに自ら町をきれいにしようという意識が薄いということですね。たとえば、雨の日に自転車に乗ってきてサドルにビニールをかぶせて、帰りにそのビニールを道路にポイと捨てて帰ってしまう。そういう光景を目にすると、残念だなあと思いますよ。また、自転車を雨の日も晴れの日も、そのままで何日も放置してあるのを見ると、私らの時代ではなかなか買えなかったのを思って、そんな時代になったのかなとつくづく思いますね。

しかし、うれしいこともあるんですよ。毎朝、わたしたちに「おはようございます」と挨拶をして、電車に飛び乗っていく人たちもたくさんいらっしゃいます。

これからも身体のつづく限り、頑張ってやっていこうと思っています。皆さん「おはよう」と声をかけてください。私も元気に「おはよう」と返しますのでよろしくお願いします。

阪急東向日駅前で整理指導中の辻さん

高齢化社会についてのアンケート

都市経営総合研究所

自治体・地域にとって、これからの高齢化社会への対応で最大の課題は何であると考えるか。これに対応するにはどうするか。

1、単に長生きするだけでなく、尊敬される老人に活力ある社会に

① 健康で長生きするだけでなく、家庭でも社会でも尊敬される人づくり、老人づくりが必要で、まずもって社会教育、学校、家庭教育が重要。

② 高齢化社会への対応で最大の課題は、短い期間で、いかにして活力を失うことなく福祉社会を建設するかということである。このため、各種施策の総合化をはかるなどがまず重要である。

2、ライフワークを追求できる「就労の場」

長い老後に生きがいを持つのは、その能力の社会還元であり、就労がその最大のものであろう。社会の中で存在意義、存在価値を感じることのできるような就労の場を確保すること（ライフワークを追求できる）こそが最大の課題である。

3、ねたきり老人とその家庭介護、孤老の問題

これからの高齢化社会での最大の課題は、増加するねたきり老人を誰がどうやって抱えて介護していくのかということである。家庭が果たしていた扶養機能が今後も持続できない場合には、自治体の負担は過大となる心配がある。家庭介護を地域や行政で支えていくシステムづくりが急がれる。そのほか、孤老の問題も大きいだろう。

あなた自身の定年後の人生（20～30年）を考えた場合、何が最も不安か、どういう生き方を考えているか

① 年金で生活できるか。子供に扶養してもらえるか（子供が扶養できる経済状態であるか）

② 寝たきりになったときに、介護者が得られるかどうか――それが不安だ。

③ 自分自身が社会の中で存在意義、存在価値を感じるようなライフワークをもち、それを次の世代に伝えて行きたい。

地域社会の再生のため、高齢者はどういう役割をになうべきか。

① 高齢者が社会参加し、今までの経験や能力を社会、家庭に還元する、地域に役立ててもらう

② 地域文化の伝承

③ 地域のリーダー、世話役の役割

④ 社会奉仕活動の担い手

⑤ 生産活動の一員としての役割

これに対応するにはどういう施策を講ずべきか。

① まず、高齢者自身の意識啓発が必要

② 次に、高齢者同士が互いに励ましあって学習できるようなグループづくり、組織づくり、またリーダー育成が必要であり、行政はそのための側面的援助

③ さらに活動や学習の場の提供――高齢者の能力を高めるため、新しい時代に対応した意識・技術を修得できる場づくりが必要

④ そのほか、情報提供

⑤ 必要最小限の運営費や機械器具購入のための補助や助成

老人の安心して暮らせる向日市を築こう

同志社大学名誉教授　嶋田啓一郎氏

であります。向日市が真に長寿を楽しめる明るいくらしの町づくりを実現することが、これからの住民と行政一体の大事業でなければなりません。

わが国の総人口に占める六五歳以上の人口比率は、約九%（八〇年国勢調査）となっていますが、向日市は、より高齢化の傾向にあり、その他の生活環境整備の優先度のように少いところもあります。西向日の一五・五%、向日の一二・三%というように高水準の地区もあり、八〇年の調査では、六五歳以上の寝たきり老人数六七人、ひとり暮らしが一三二人。高齢化に伴う施策や市民の協力体制の積極化を必要とする事情が、年とともに顕著になって行こうとしています。市当局では、緊急の保健対策はもとより、所得・雇用・住宅その他の生活環境整備の優先非位を考え、その限られた予算で、正常な地域生活が維持できるように、地域住民の活発な協力が一層必要になっているのです。高齢者問題は、他人ごとではなく互い自身の問題なのです。

「足らぬ、足らぬは工夫が足らぬ」と言わねばなりません。

現在すでに、ひとり暮らしの老人のうち80パーセントは女性であること、また親や配偶者などのねたきり老人の介護の90パーセントが女性という現状からみて、高齢化問題は女性にとって避けては通れない大きな問題だと言わなければなりません。女性の多くは家庭の中で夫に、家族に、経済的にも精神的にも依存しており、それ以外の働く婦人の多くも社会的に経済的に不利な条件にあるという場合が少なくないという点において、高齢化社会に向けて女性は特に、経済的にも精神的にもより強い自立が求められると思います。

このことから、女性が豊かな人生をおくるために、自立して生きることのできる社会的状況をつくっていくことが、高齢化社会の進行のなかで見落としてはならない重要な課題だと言えます。

まちをきずきましょう」向日市民憲章で、私たちはこう誓い合っています。「福祉」という言葉が、もともと中国・漢の時代の書『易林』の「天の授ける極みのない齢いを全うして、喜びに預かること」からうまれたということは、意味深長であります。

しかも若いのです。しかして、老人の健康と福祉を守るべく苦心を重ねています

老人福祉は、施設保護中心ではなく、地域福祉のなかでも、特に在宅福祉に重点を置くことが必要となってきました。ひとり暮らしやねたきり老人にも、できる限りコミュニティのなか

サラリーマンは年金を期待

40歳前後のサラリーマンに「老後の生活で何をあてにしているか」というある民間団体のアンケート調査をみると、第一が公的年金、第二が退職金、第三が貯蓄、第四が就労でした。

毎月の必要な生活費のうちで、年金に期待する部分は5割というのは少ない方で、多い人になると7割から8割を年金に依存するといっています。老後の生活費の柱に公的年金を据え、あと退職金を貯蓄、そしてできれば第2の就職口を見つけて生活費をふやそうと夢見ているのが、一般サラリーマンの共通した生活設計といえそうです。

安心して暮らせる地域社会づくりを

寺戸町南垣内　浅田英津子さん　22歳

日頃、核家族のなかの子どもより、老人や兄弟の多い子どもたちの方が心ゆたかに育っていると思っていましたから、この日につく

高齢化社会が、真近に大きな社会問題となりつつあります。でも、まだまだ実感としてピンとこないというのが、わたしの正直な感想です。

だけど、身近な問題として、戦争や貧しい生活のなかで、想像できないような苦労をしてこられた今のお年寄りの皆さんが、安心して暮らせる向日市を、行政とわたしたち市民が共に作っていくことが必要ではないでしょうか。そのことが、お年寄りはもちろん、障害をもった人たちや子どもたちも、そして、すべての人たちが安心して暮らせる向日市になることだと思います。

向日市に住んで良かったなあ……と思えるように、市民のすべてが力を出し合い、知恵をしぼって、すばらしいまちにしていければと思います。

私たちが築く福祉と文化の国づくり

寺戸町中村垣内　一新秀樹さん　35歳

高齢化社会……逆三角形の人口ピラミッド。わが国の人口動態の重大なイメージが浮かんできます。

わたしは、戦後のベビーブームに生まれたいわゆる"団塊の世代"であり、過剰人口が引き起こす社会問題に、終生つきまとわれる世代にあります。このことから、高齢化社会は既にわたしたちの世代の問題だと言えます。

昨今の厳しい経済状況のもとにあって、福祉予算の削減や福祉制度の見直しが言われています。しかし、それは決して政治や経済の時々の状況に左右される性質のものではなく、人間が人間らしい老後をどう生きるかということであり、いわば広い意味での文化の問題ではないでしょうか。そこには、医療や年金や福祉厚生施設だけでは解決のつかない、複雑で深い老人の心の問題が存在しているからだと思います。

わが国が、真の意味での福祉国家、文化国家になり得るかどうかという点で、重大な岐路に立たされていると思いますが、わたしたち"団塊の世代"は、国と自治体の取り組みとその施策の実行を注意深く見守る必要があるとともに、自らも主体性をもって高齢化社会に立ち向かっていけるだけの力を身につけるべきだと思います。